



山登如

2020年度 付中通信第2号

陶冶（「とうや」と読む！）

2020.4.15

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

建学の精神＝徳性の陶冶

本校の教育活動は、学園創立以来 120 年以上にわたり、建学の精神「秀でた自己の徳（特性）を磨くこと」に依拠し展開されてきました。それは徳性の陶冶によって、社会に貢献できる人を育てることができ、その人もまた幸せになることができると信じてきたからです。本校の教師は建学の精神に、ある意味、絶対の価値を見出してきたということが出来ます。それとともに、先達たちは、この価値を最大限に高めようと試行錯誤を繰り返してきました。つまり、時代の変遷の中で、社会の状況や変化を汲み取りながら、徳性の陶冶の具体的な実践に取り組んできたということです。



新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の一環として、家庭科の授業でマスク作り

私たちが、現代社会のあり様と今後の動向をしっかりと見すえた上で、そこから導きだせる社会的時代的な要請に応じた教育を考えることを怠ってはなりません。私たち教師の使命とは、結局のところ、その内容を生徒たちが最も意欲的になれる言葉で解き、彼ら自身がはっきりとした目標を掲げて歩みだせるように導くことです。

社会的時代的な要請



4/10 最大6社の報道陣の取材を受けました

AI化、グローバル化、そして少子高齢化によって日本社会は劇的に変化しています。そしてその変化の先を見通せる者はだれもいません。子どもたちの将来の職業や働き方そのものも見通せなくなったと言ってよいかと思えます。また、手段や方法はたくさんありそうな気がするのですが、肝心の何をしたらよいか、何をすべきか、が一層わかりにくい社会

になっています。さらに、大人が信じて歩んできた社会の在り様も生活スタイルも変貌し、特に職業に関しては従前の大人の発想を信じてしまったら、将来取り返しのつかないことになるということも薄々わかってきました。

このような時代の感覚を、学校教育の中でどのように採り上げ、中身のある教育として子どもたちに落とし込んでいくのか。現場の教師は、自信をもって子どもたちに語れる言葉を持つようになるのだろうか。

以上のような自問自答を経て、私は、先行き不透明で、しかも劇的な変化を遂げるであろう時代と社会に対応できる教育として、次の2点を掲げ実践していきたいと考えました。

「志を育む教育」と「多様性社会を生み出す教育」

次号では、この2つの教育について、詳しく語りたいと思います。